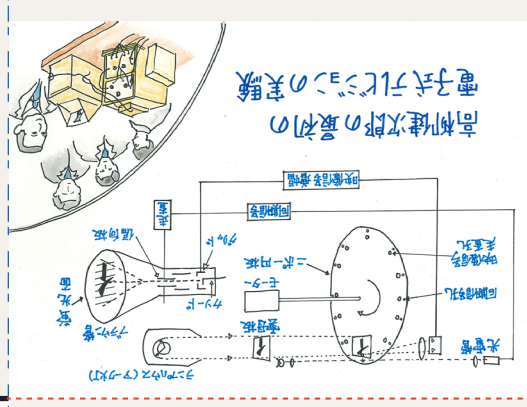
浜松の偉人シリーズ ミニ折本【高柳健次郎 編】

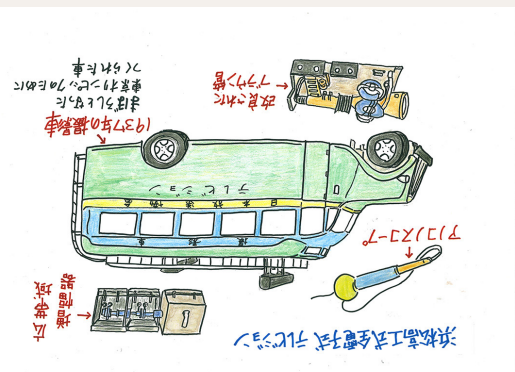
A3 サイズで印刷して、線のとおりに切り込みを入れ、折ってください

切る ―――― 山折 …… 谷折 – – – –



大正 13 年（1924 年）健次郎は、浜松高等工業学校（今の静岡大学工学部）に勤務しました。
まだラジオ放送が始まっていない時代に、テレビジョンの研究に取り掛かりました。

そして大正 15 年（1926 年）画像を送る側は機械式を使いながらも、世界で初めてブラウン管の画像に、カタカナの「イ」の字を写すことに成功しました。
世界最初の電子テレビが、浜松で誕生しました。

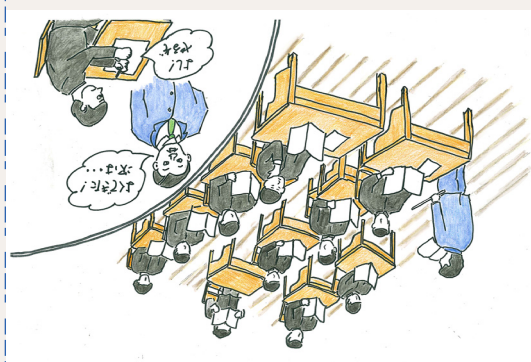


健次郎は、テレビ放送の実用化に向けて研究仲間と共に広帯域信号増幅器の発明、アイコノスコープやブラウン管の改良を行いました。
昭和 10 年（1935 年）に浜松高工式全電子式テレビジョンが完成しました。

昭和 15 年（1940 年）東京でオリンピックが開かれる予定でした。
そこで、NHKはテレビ中継をしようとこの浜松高工式電子式テレビを採用しました。

残念ながら、第２次世界大戦のため、東京でのオリンピックは取りやめになりました。

その一方で、テレビの研究は続けられ実験放送は、日本が戦争を始めるぎりぎりまで続けられました。



健次郎は、明治 32 年（1899 年）今の浜松市中央区安新町に生まれました。
小学校１、２年生の頃、健次郎は体が弱く、勉強も運動も苦手な子でした。

和田高等小学校時代、渡瀬先生が健次郎の長所をほめて、粘り強くやりぬくことを教えました。

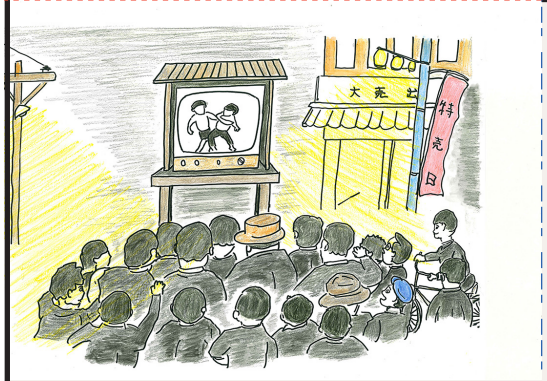
健次郎は、「渡瀬先生のような先生になりたい。」と強く思い、静岡師範学校に進みました。

当時、イギリスでは、機械式テレビジョンの実験成功という知らせがありました。
しかし、健次郎は真空の中を走る電子こそが重要と考え、ブラウン管の研究をしました。

静岡師範学校で、健次郎は、物理の時間に「真空管放電実験」に出会い、電気に関心をもちました。

中村幸之助先生からの「10 年先、20 年先を目指した研究をしなさい。」という教えを大切にし、どんな研究テーマがよいか、悩みました。
そうした中、「ラジオ放送が無線で声を送ることができるならば、映像も無線で送ることができるのではないか。」と考えました。

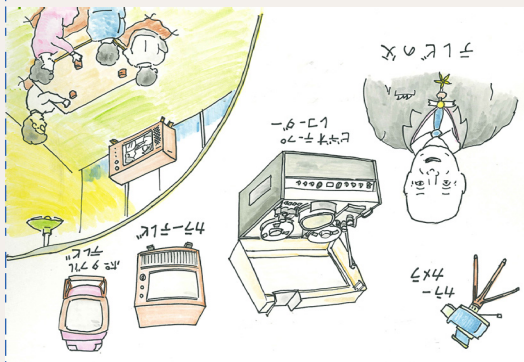
健次郎は、それを「無線遠視法」と名付けて研究テーマとし、テレビ研究に一生をささげようと決意しました。



長い戦争が終わりました。
昭和 28 年（1953 年）になり、NHKや民間の放送局が、テレビ放送を始めました。
昭和 30 年前後、駅前や商店街の広場などには街頭テレビが置かれ、多くの人々が

が見ていました。

このころ、健次郎は、研究仲間と共に業界をメーカーの壁を越えてテレビを作る基準を統一したり、部品や材料をそろえて生産したりする体制をつくりました。
その結果、値段が安く、性能のよいテレビを作ることができるようになり、テレビが全国に広がりました。

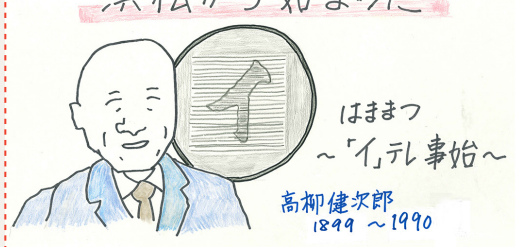


戦後、健次郎は日本ビクターという会社で、若い研究者たちとテレビの研究を続けました。
健次郎が開発にかかわった研究は、カラーテレビやビデオ（後のVHSビデオ）など多数あります。

そこでは、チームで研究することを大切にし、多くの技術者や研究者が育ちました。

このようにして、健次郎はテレビジョンの技術の基礎を築きました。
そして、テレビ産業の技術リーダーとしての役割を果たしました。
その結果、日本のテレビジョンの技術は世界で最も進んだものとなりました。

浜松の偉人シリーズ　ミニ折本



「テレビの父」と言われた人がいました。
その人とは、浜松で生まれ、浜松で活躍した高柳健次郎。
「テレビの歴史は浜松から始まった」の始まりです。

浜松科学館で会いましょう！

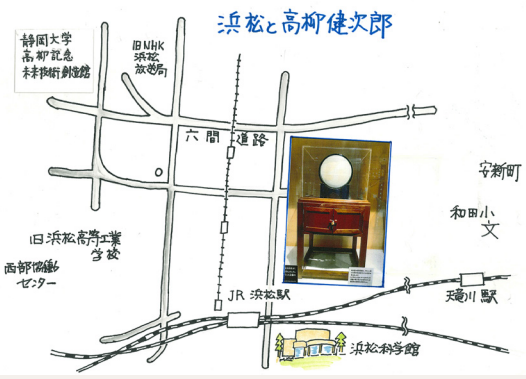
常設展 2 階 展示「高柳健次郎」

主な参考資料

・「テレビ事始」高柳健次郎／有斐閣
・「私の履歴書」高柳健次郎／日本経済新聞掲載
・「イロハのイ テレビ事始」浜松市博物館

浜松科学館
Hamamatsu Science Museum

作成：2025 年　監修：静岡大学高柳記念未来技術創造館

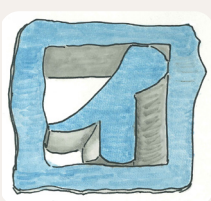


カラーテレビやＶＴＲなどは、人々のくらしぶりに大きな影響を与えました。
こうした功績により、昭和 56 年(1981 年)高柳健次郎は、文化勲章を受章しました。

昭和 62 年（1987 年）には、浜松市名誉市民となりました。

浜松科学館には、「イ」の字が写しだされたブラウン管などの資料が展示されています。

2026 年に、高柳健次郎が世界で初めて「イ」の字の受像に成功してから 100 周年を迎ます。



作成：浜松科学館　監修：静岡大学高柳記念未来技術創造館